

## 【抄録】

要介護高齢者が約 700 名近く入院している高齢者の多い病院に勤務して 20 年以上が過ぎました。隣接する介護老人福祉施設、ケアハウス、グループホームを含めると約 1000 人近くもの高齢者が一つ屋根の下で生活している施設です。ここで人生の最後 10~20 年位の患者さんを目の当たりにしながら、歯科臨床に携わっていると高齢者が「食べる」ことに、筋肉の減少や減弱、機能性の低下がみられるサルコペニアが大きな障壁となっていることを感じます。

このサルコペニアが摂食嚥下機能に関連する筋肉でみられても、なかなか視覚的にも認知することができませんし、「飲まない」「ムせる」「口腔内に食渣が残る」などの主訴は、単に義歯が合っていない、歯がちゃんと治療されていないのが原因などと誤解されている面も少なくないと思われます。しかし、このような口腔の筋肉のサルコペニアが原因とも考えられる諸症状に対して、良く適合した義歯はもちろん舌接触補助床 (PAP: Palatal Augmentation Plate) などの嚥下補助床、いわば口腔内装具などによる専門的歯科治療や、歯科的ケア、口腔機能訓練指導が大きな効果を期待できる症例も少なくありません。私たち歯科は、歯科しかできない専門性の高い高度な技術と知識によって口腔のサルコペニアにも立ち向かうことができると思います。

今までの歯科医学では口腔器官の形態回復や形態維持を主眼として進歩してきましたが、その口腔器官を機能させるための筋肉の減少や減弱に対するアプローチがあつてこそ、はじめて「食べる」ことに繋がるという認識は重要だと思います。講演では「飲まない」「むせる」「口の中に食渣が残る」などの具体的な症例を通して、これらの症状を摂食嚥下障害の視点からどのように考えて、そして歯科はどう対応するのか、さらに最近になって歯科界でも話題になることの多い認知症の症例などを通して、摂食嚥下障害の考え方について考察したいと思います。

【役職】 北海道大学 臨床教授  
北海道医療大学、九州歯科大学など 非常勤講師

日本静脈経腸栄養学会 (代議員, 学術評議員, NST 委員会委員)  
日本リハビリテーション栄養学会 (代議員, 監事)  
日本静脈経腸栄養学会 北海道支部 世話人  
札幌栄養管理情報ネットワーク研究会 世話人  
北海道胃瘻研究会 世話人

【略歴】 1986 年 北海道大学歯学部 (14 期) 卒業  
1990 年 北海道大学大学院修了 歯学博士  
市立釧路総合病院歯科医長  
1991 年 北海道大学歯学部 歯科補綴学第二講座 助手  
1996 年 現職  
2017 年 Chevaliers du Tastevin (France) 叙任

【著書】 老化と摂食嚥下障害 2017 医歯薬出版  
絶対知りたい義歯のこと 2016 医歯薬出版  
続 5 疾病の口腔ケア 2016 医歯薬出版  
5 疾病の口腔ケア 2013 医歯薬出版  
サルコペニアの摂食・嚥下障害 2012 医歯薬出版 他